

Title	講座開設当時から現在までの活動報告 : 講座開設25周年を記念して
Author(s)	森本, 美奈子
Citation	生老病死の行動科学. 2019, 23, p. 19-20
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/73614">https://doi.org/10.18910/73614</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 講座開設当時から現在までの活動報告

### —講座開設 25 周年を記念して—

(梅花女子大学心理こども学部心理学科) 森本 美奈子  
(Baika Women's University) Minako Morimoto

臨床死生学・老年行動学講座開設からはや四半世紀を迎えることに、時の経つ速さを実感します。ここまで研究室が引き継がれてきた歴代先生方のご尽力に敬意を表すると同時に、まずはこのたび、私自身のこれまでの活動を改めて振り返る機会をいただいたことに、感謝申し上げます。

私は、2002年に博士後期課程修了後、現在までの約15年間、梅花女子大学心理こども学部心理学科と同大学院現代人間学研究科心理臨床学専攻に職を得て、主に臨床心理士の養成に携わってきました。

講座開設当時を思い返しますと、私は大学に入学してで何をしたいのかも具体的になっておらず、ひたすら自由を謳歌していました。ただ、その頃手にした柏木哲夫先生のご著書「死を学ぶ一最期の日々を輝いて」に影響を受けたことだけは今も鮮明に記憶しています。そして発足から間もないこともあってか、その自由な雰囲気やに吸い寄せられるように、自由な同期メンバー10名とともに一致団結して、大人気であった臨床老年行動学研究室、通称りんろうに所属させていただくことになりました。

またもう一つ、臨床心理士を目指せるということも、りんろうを選択した大きな理由でありました。ゼミでは文字通り「老いと死」をテーマに、ホスピス実習へ参加させていただき、まさに死にゆく人々やその家族へのケアの現場、さらにはカンファレンスを通しての協働のあり方など、このとき肌身に感じた体験が、今の私の心理臨床における礎となって活かされているように感じます。

さて研究の方はといえば、当時私は決して得意な方ではありませんでした。そもそも研究のけの字もわかっていなかった私は、柏木先生の「臨床に役立つ研究をなさい」というお言葉を胸に、まずはとにかく身体で感じるしかない！と児童養護施設や高齢者福祉施設など、様々な現場に出向いて行ったものでした。

研究テーマを模索する中で、神戸大学や大阪大学精神医学教室との御縁をいただき、高齢者研究に携わるようになり、以後約15年にわたり、神戸大学では家族教室や当事者会運営に関わってきました。

アルツハイマー病患者様には、回想芸術表現療法や神経学的音楽療法を取り入れた足脳トレプログラムへご参加いただく中で、自信を失っておられた方が、徐々に表情の豊かさなどは勿論ですが、何よりも主体を取り戻されていく変容の過程がみてとれたことは、有り難いことでした。それは、患者様と日々過ごしておられるご家族への心理教育や私達からの関わりもありますが、患者様同士の関わりが大きかったように思います。

その後は、京都民医連病院で緩和ケア病棟との御縁をいただき、ご本人やご家族のケアに関わらせていただきました。またこの三年は、大学院附属の心理教育総合相談センターで、センター長として約40名のスタッフとともに運営に関わっています。被虐待の子どもへの遊戯療法や、発達障がいの子どもの療育やSST、成人となってからひきこもった子どもとその親への心理面接、さらには精神障がいや発達障がいを基盤にした大人の鬱、パニックに対する認知行動療法など、地域の方々に対するサポートを提供させていただいています。

とくに認知行動療法では、科研プロジェクトに参加して回数制限を設けた一定のプログラムを開発してきましたが、単にプログラムをこなせば誰でも効果が出るかというところではなかったことも興味深かったことの一つです。効果が出るというのはどういうことか、一時的には無理してでも適応しようと自己のコントロール力が芽生え、一見まとまりが出てくるわけですが、その後も再発せずうまくやっていける人は、やはりセラピストとの関係において、何かぐっと深まり繋がれた人であったわけです。それはもちろん、人生の始まりにいる子ども、またその支えとなる親やその親にとっても同じことであり、セラピストを足掛かりとして、様々な関係性に汎化していく力をつけていただくことこそが、目指すところとなります。

まさにゆりかごから墓場まで、人々の人生に伴走させていただいたこれらの経験から感じることは、関係を繋ぐことに寄り添うことがいかに大切かということ。それぞれの人生におけるステージや社会における立ち位置、困りごとは異なるのですが、その人を中心として様々な繋がりがうまくいっていない時、人は幸せを感じられないし、主体をもって力を発揮することはできません。

その繋がる力をもてるような後ろ支えができる研究者であり、臨床家でありたいし、またそういった人材を育てられる機会をいただいていることに、やり甲斐を感じています。

本学大学院生の中には、精神保健福祉士や看護師、教師などの社会人を経て、日々のケースマネジメントだけでなく、さらに深い繋がりの必要を感じて心理職を目指したいとして来られる方も半数近くいます。私の研究室では現在、在宅高齢者の孤独や統合、超越、また、小児慢性疾患経験者や傷つきやすい人々のレジリエンスを支える関係性のあり方、といった「老いと死」にかかわるテーマについて、院生達がそれぞれ研究を進めています。

また今年度より、学部教育においても公認心理師養成カリキュラムを設置し、医療健康心理学、死生心理学といった科目も担当させていただくこととな

りました。臨床死生学・老年行動学講座での学びが、確実に後進の人たちに繋がっていくことに喜びを感じるとともに、益々の講座の発展をお祈りし、このような機会をいただいたことに感謝の気持ちを込めて稿を閉じたいと思います。